

## 「哲学カフェとは何か ～事例研究に基づいて～」

### —論文抜粋と応答（おまけ）—

君嶋佑果 山本和則

---

この投稿は君嶋の卒業論文である「哲学カフェとは何か ～事例研究に基づいて～」<sup>1</sup>の抜粋と、それについての山本和則氏によるコメントの2本立てで構成されている。

はじめに投稿の動機を説明させていただきたい。簡単に自己紹介をすると、私は君嶋佑果といい、昨年までの旧姓は花岡である。2018年3月に京都大学文学部哲学科を卒業後、京都で着物の染み抜き職人として働くも、2018年秋に結婚した夫の転勤に伴い2019年春に退職。現在は関東にて無職の身であり、自分で哲学カフェを開いているわけでもない。この無職がなぜ今回「哲学プラクティス連絡会」の機関誌に投稿することになったのかというと、私の卒業論文の主題が哲学カフェであったことに関係する。

哲学科の卒業論文というと、基本的には哲学者を一人選んで著書を読み、問いを立てるのが普通なのだろうが、残念なことに私は元来文章を読むのが不得手であった。「じゃあなんで哲学科に入ったの」と思われても仕方がないのだが、どういうわけか私には哲学という学問が持つ開かれた雰囲気、哲学的思考、探求といったものへの興味や愛好が人一倍あった。大学院への進学を考えていなかった私が、限られた時間で自分なりに「哲学のここが良い」と言えはしないかと悩んだ結果辿り着いたのが、哲学対話・哲学カフェであった。こうした経緯もあって、研究手法としてはフィールドワークや対話に重きを置き、論文として形にする上では文献に加え参加者へのアンケートや録画記録を活用した。研究手法から手探りであったため論文にするのは非常に困難であったし、完成し

---

<sup>1</sup> この論文は君嶋（当時は花岡）が京都大学文学部哲学専修に2018年1月に提出し、同年3月に学位を取得したものである。また本論文は公開されていない。

てからもいざ公開するとなると不安なところもあった。しかしながら、様々な方々の協力によりなんとか形にすることができた卒論であるので、哲学カフェ・哲学対話に関わる方々の参考にならばと思ひ投稿させていただいた次第である。

## 哲学カフェとは何か ～事例研究に基づいて～

※字数の都合上、一部文章をカットしている。

### 1. 序章

#### (1) 研究目的と背景

本研究の目的は「哲学カフェ」の目的と意義を、事例研究に基づいて明らかにすることである。

哲学カフェは哲学実践と呼ばれる哲学対話活動の一つである。哲学対話とは身近な問題について対話を通して深く考えるという活動であるが、哲学実践の中には哲学カフェの他に哲学教育や p4c(philosophy for children)を含む「教育」、臨床哲学などの「ケア」といった分野がある。大まかに言えば、教育では学校の授業に哲学対話を取り入れることで、生徒が「論理的思考力を養い探究心を育む」ことが目指されている。一方ケアでは、病院や公共スペースで患者とその家族・医療従事者を集め、当事者同士もしくは混ざり合った中で哲学対話を行うことで、人々が「癒される」ことが目指されている。このように教育やケアには確固たる目的があるのに対し、哲学カフェにはこのような明確な目的は定められていない。また哲学カフェ全体をまとめる組織は無く個人々々が哲学カフェを自由に開き活動しているので、教育やケアに軸足を置きつつカフェも行うという人も多い。このため、哲学カフェについては他分野と同じ哲学対話活動として一括りに語られたり、主催者の理想から語られたりするばかりで、哲学カフェの固有性や活動自体から見た意義は十分に語られているとは言い難いのが現状である。また、参加しやすい雰囲気を出す意図からか、分野や内容に関わらずカフェという名前が付けられるこ

## 論考の扉

とがあるために、哲学カフェにとってカフェがどのような役割を果たしているのかはあまり重視されず、カフェ固有の性質もあまり語られていない。このように活動が曖昧であるために、様々な問題が起きていることもわかった。大きく分けると問題は3種類あり、哲学カフェ業界内の問題、哲学研究者業界との間にある問題、一般の人々との間にある問題である。

まず哲学カフェ業界内の問題について。哲学カフェはそれぞれのカフェの個性が尊重され多様であることもその特徴とされる。しかし一方で、主催の手法の違いから齟齬が起きたり、「あれは哲学カフェではない」という発言が主催や哲学カフェリピーター<sup>2</sup>から出たりすることから、明確な定義は無いながら参加者に求められる姿勢があることはわかる。個々の哲学カフェの自由が単なる無秩序になってしまわないためにも、この姿勢を明らかにする必要がある。

次に哲学研究者業界との間にある問題について。実践者<sup>3</sup>は以前よりも関係は良好になったと語るが、現在でも哲学カフェは一部の研究者から「無意味」と軽視されたり「無秩序」と批判されたりすることがある。逆に実践に携わる研究者の中には実践こそ哲学の真価を発揮しているという強い主張もあり、しばしば研究と実践の対立図式が取られる。これについては、まず市民が参加する活動と研究を対立的に語るべきではなく、哲学カフェの対象・場所の性質を確認すべきであると思われる。「哲学の真価は実践の方にある」という強い意見は取らず、かといって無意味だと一蹴されることも無いように、適切な形で活動を取り出す必要がある。

そして、一般の人々との間にある問題について。哲学カフェに参加経験が無い一般の人々から「既存の活動との違いがわからない」「どういう活動かわからない」「本当に場が成立しているのか?」という声や疑

---

<sup>2</sup> 「複数の哲学カフェに参加経験がある人」という意味で使用する。

<sup>3</sup> 主催者=哲学カフェを主催する人、進行役(ファシリテーター)=その回で対話の進行を担当する人、実践者=哲学対話活動を推し進める人として使い分ける。

間がある。今後も新規の参加者を増やしていくために活動の実態を明らかにする必要があるだろう。

こうした問題を念頭に置きながら、本論文ではカフェという場所の特性に注目し、類似の活動と差別化を図ることで、哲学カフェ固有の目的と意義を明確にしたい<sup>4</sup>。

## (2) 方法

現地調査とその中で得た資料を基に哲学カフェの分析を行った。研究対象である哲学カフェは体験・活動・現象という形であること、哲学対話ではなく哲学カフェとして見ると文献や先行研究が乏しいこと、記述しているものも主催の意図が前面に出ており活動自体から語られていることが少ないことなどから、実際に観察し資料を得る必要があった。しかしながら、目的においても述べたように、主催によって手法が異なること、メンバーや内容が毎回不確定であることや進行役の熟練度がまばらであったり、全体として発展途上であったりすることなどを原因として、カフェ毎にそしてその回毎に充実度にばらつきがあり、また、携わる人々の活動に対する理解が曖昧であるため、調査を行いその様子をそのまま記述するだけでは哲学カフェの活動を語るには不十分であると考えた。加えて経済的に全国の哲学カフェを調査することも不可能であった。こうしたことを背景に、この多様過ぎる活動の全体に言及するには、活動方法やルール、カフェという場所の性質など、共通して考えられているものから、哲学カフェは何を目指しながら活動を行っており、そのためにどのような工夫がされているのかを示すことが有効であると考えた。具体的なフィールドワークにおける調査内容<sup>5</sup>は以下の通りである。

- ・調査時期は2016年4月～2017年11月末頃

---

<sup>4</sup> 日本以外で行われる哲学カフェについては言及しない。

<sup>5</sup> なお、研究全体としては、フィールドワーク以外に、少ないながら哲学カフェやカフェについての言説、そして他の類似の活動についての言説、ブログやSNSで公開されている実感も参考にした。

## 論考の扉

- ・実際に対話に参加(哲学カフェ 12 か所、計約 30 回、高校での哲学対話 4 回)
- ・哲学カフェ終了後の主催者や居合わせた他の哲学カフェの主催経験者・研究に関心を持った参加者と対話(話した主催：16 人、主催と話した回数：約 30 回)
- ・対話後、参加者にアンケート(全 11 回、累計回答数 59、回答率 98%)
- ・Google フォームで哲学対話進行経験者にアンケート(8 名回答、うち 5 名未対面者)
- ・カフェフィロの代表である山本氏協力のもと哲学カフェを計 2 回主催。事前に許可を取り対話を録画したものを文字に起こし、資料化

## 2. 対話開始まで

### (1) 哲学カフェのルール説明から見る「求められる姿勢」

哲学カフェは基本的に初参加者がいることを前提としており、毎回はじめに哲学カフェとは一般的にどのようなものか、この哲学カフェは何を目指しているか、開催場所についての諸注意、対話のルールなどが丁寧に説明される。対話のルールは哲学実践先駆者たちの考えや理論を参考にするだけでなく、自身のカフェにおける経験や他の実践者からの情報から独自に変更を繰り返し、それを経て安定していくという。何をルールとして選ぶかは、どういったポイントを重視しているか、特にどういった事態を避けたいかなどによって異なる。しかしながら、主催や分野に関わらず「深く考えてみること」「よく聴くこと」「人を傷つけるような発言を避けること」は必ずルールや説明の中に盛り込まれる。ここから哲学対話には共通して求められる姿勢があるということが推測される。そこで本節ではまず、複数の実践者の挙げるルールからその姿勢がどのようなものかを分析したいが、その前になぜ求められる姿勢が共通したものになるのかについて、一言述べておく。

哲学カフェの主催者は基本的に盛んに交流をしている。交流の場は「哲学プラクティス連絡会」「臨床哲学会」といった大会、他のカフェやイ

ベントへの参加、普段のSNS上などである。またメタ哲学カフェという哲学カフェについて話し合う哲学カフェも各地でしばしば開催されている。主催者たちはそのような機会を通じて、個々のコンセプト、哲学対話に何を見るかという大きな話から細かな手法、面白かったテーマから進行で困ったことなど様々な意見交換、情報交換をして実践に活かしている。自身のカフェだけでなく哲学カフェ全体を発展させたい、そして哲学の面白さや大切さを市民に広めたいという思いを強く持つ人が多い印象である。このように、試行錯誤を繰り返しながら哲学対話に良いとされるものが取捨選択されていき、結果として、求められる姿勢がほぼ共通したものになっていったと考えられる。

では、ルール分析に移ろう。具体的な個々のカフェ、主催者が挙げる対話のルール<sup>6</sup>は以下のようなものである。これらを①探求する姿勢、②頭ではなく場で考える姿勢、③安全であろうとする姿勢に分類することができる。本論文ではこれらを哲学カフェに求められる姿勢とする。詳しくは後述する。

・梶谷真司氏「1.何を言ってもいい(②) 2.否定的な発言はしない(③) 3.発言せずに、ただ聞いて考えているだけでもいい(③) 4.お互いに問いかけることが大切(②) 5.誰かが言ったことや本に書いてあることではなく、自分の経験に即して話す(②③) 6.結論が出なくても、話がまとまらなくてもいい(②) 7.わからなくなってもいい(①)」(梶谷, 2015, 102-3)

・鷺田清一氏「1. 挙手し指名されてから発言する(③)2. (問題提起にあたっては)じぶんが体験した具体的な事例をあげながら話す(③)3. 他の参加者の発言は最後まで聴く、他の人の意見や文章の引証はしない(②③)」(鷺田, 2014, 196-7)

・寺田俊郎氏「1. 自分の言葉で話す(②③) 2. 人の話をよく聞く(②③)

---

6 哲学実践で有名な研究者及び、筆者が実際に参加したカフェや交流のある主催者のルールを挙げる。

## 論考の扉

3. 自分の意見は変わるかもしれない、という前提を持つ(①)」(山本, 2016)

・カフェフィロ山本氏「1. いつもよりゆっくり考えよう(①) 2. 話すより質問する、聴く(②) 3. わからないことにこだわろう(①) 4. 頭にあることをとりあえず出してみよう(②)」(筆者が主催した哲学カフェの文字起こし資料より)

・あまがさき哲学カフェ赤井氏「1. 発言する時は挙手し、進行役に指名されてから発言してください(①) 2. おひとりの発言が終わるまで、聴いてください(②③) 3. できるだけ手短かに話す。発言しないのも自由です(③) 4. 参加者が不快になるようなことや乱暴な物言いはしないでください(③) 5. 迷いながら話してもかまいません、途中で中途半端になってもかまいません(②) 6. 人の意見を否定せずに受け止め、多様な意見を聴きましょう(②③)」(赤井, 2013)

次に、上記3つの姿勢について説明する。まず、①探求する姿勢について。これはテーマについて様々な角度から疑問を呈し、考え、それに答えようとする姿勢である。すぐには解決できそうになかったり答えが一つに定まらなかったりするような問いについて、より正しい、より良いと思えるような理解を根気よく試みるこの姿勢は哲学に欠かせないものである。よって、この姿勢①は哲学カフェの「哲学性」と言えるだろう。哲学カフェでは、合意や決議のようなゴールが設定されていないので、何らかの結論を目指すことよりもより深くそして多角的にテーマ・問いについて考えることが推奨される。なるべく効率よく早く作業をこなしていくことが要求されることが多い普段の生活とは大きく異なるだろう。

次に、②頭ではなく場で考える姿勢について。自分の考えや意見の不備を自力で見抜いて修正することは困難なことであり、論理的な誤りがあってもそれに気づかずそのままにしてしまうことも少なくない。余裕をもって何かについて考えようとしても、一人で自問自答をしているう

ちに堂々巡りになったり、集中力が切れて途中で諦めてしまったり、他のことに気を取られてしまったりして探求が終了してしまうことは往々にしてある。ところが哲学対話では一人ではなく、対話という形をとって複数人で思考を行う。ここでは自分の頭の中に留めるのではなく、むしろ未完成な意見でも場に投げかけ、共同で問いの吟味を行い、考えを深めるために必要な作業を分担することで個々が探求する際のハードルを下げるのが重要とされる<sup>7</sup>。

そして③安全であろうとする姿勢について。気軽に安心して話せる場所を作る上で気を付けなければならないのが安全である。哲学対話の際の安全について、多くの実践者によって参考にされる考えがある。P4C(philosophy for children)Hawaii のトーマス・ジャクソンによって提唱された3つの安全、1.物理的安全(身体が傷つけられない)、2.精神的安全(感情が害されない)、3.知的安全(発言や質問に対して蔑まれたり嘲笑されたりする危険がない)である(小川, 2017, 67-8)。1,2 が守られるべきなのは当然として、3 の知的安全に関して言えば、これは哲学カフェの場合、傷つけるような発言はもちろん、傷つかないまでも発言をしにくくさせる発言や態度をしていないか注意を払うということになるかと思われる。例えば自身の職歴や職業をその地位を振りかざすために明かす、高圧的な物言いをする、知識をひけらかすといったことはしないということである。もちろん、具体例を出す際に職業を明かしたり、本やテレビの話引用したりということは実際にあるが、それはあくまで話を伝わりやすくするためであって発言権を独占するためではないと理解しておかなければならない。ただ実際には、無意識にまた悪意無くそのようなことがなされることが多いので、進行役は常に参加者が嫌な思いをしていないか、話についていけない人がいないかなど気を配り確認しながら対話を行う必要がある。とはいえ判定が微妙で指摘をしにくい場

---

<sup>7</sup> 哲学教育の言説では、他者と共同で探求を行う理由が、他者が自身の真理探究に価値を持つためであるとされているが、異論もあるという。対話という形を取る意義を実践者は色々な説を唱えている。



## 論考の扉

合も多いので、進行役は途中で全体に呼びかけるように注意をしたり、それとなくほのめかしたりといった仕方でそうした姿勢へと促していく<sup>8</sup>。

これらの姿勢のうち哲学対話の場において最も重要なのは①の探求する姿勢であり、このために②と③があると言ってよい。姿勢③が守られ安心した状態ではじめて、姿勢②のように場に対して話すことができ、姿勢①のような探求が可能になると考えられ、そのような場の実現と向上が目指されている。

### ○姿勢の先にあるもの

これらの求められる姿勢の先にあるものは何であろうか。ルールでも確認したように、カフェではディベートのように片方の立場を固持する必要もなければ、会議のように答えを一つに定める必要もない。また、研究の場ではないので新たな理論の構築や哲学の発展を目指すことも求められない。しかし、雑談とは異なりある程度の方向性が定まっている。では哲学カフェで行われる哲学対話は何を目指しているのか。

調査の結果、参加者は哲学カフェにおいて普段の生活で関わらない人と話し考えることで発見や驚きを得ていることがわかった。ここから、求められた姿勢を守った先にあるものは「対話的思考を通じた気づき」であると考えられる。だとすれば、気づきの追求は際限がないため、まとめをせず時間が来たら終わることが推奨されるのも説明がつく。

そこで、次章ではまず、参加者が様々な気づきを得ていると考えられる、哲学カフェの実際の対話の内容を紹介する(第1節)。その上で、哲学カフェの固有性が純粹に探求に没頭できるという点にあることを哲学カフェの「カフェ性」と(第2節)、他の哲学対話活動との比較という観

---

<sup>8</sup> 進行役は対話に必要な姿勢を参加者が取りやすくなるような工夫や、逆に阻害するようなものを予防・回避することが期待される。しかし、人数やメンバーによっては困難な場合があるので、進行に委ねるのではなく、参加者も場所を作り上げる一員として主体的にルールを守ることが前提とされる。

点から示す(第3節)。

### 3. 実際の対話の様子と哲学カフェの固有性

#### (1) 実際の対話の内容

実際の対話の内容を具体的に示すために、カフェフィロの代表である山本氏協力のもと計2回哲学カフェを主催し対話の録画を行った。カフェフィロのホームページで録画と研究資料化の旨を明記し告知してもらったが、場所は普段から山本氏が定期的に哲学カフェを主催する四条烏丸の町家カフェ<sup>9</sup>で行った。テーマは告知では未定として、その場で参加者が日頃の関心を出し合い進行以外の多数決から決定した。本論文では第1回目のテーマ決定後、1時間分<sup>10</sup>の対話から話題と論点を抽出したものを列挙し、対話内容の紹介とする。

○具体的な話題の推移(第1回主催、テーマ「見栄とは何か」の場合)<sup>11</sup>

#### ■見栄の種類について

- ・自分に足りないものを補う見栄と優越感を得ようとする見栄の2種類がある。
- ・人並以下から人並程度に見せようとするのが前者で、人並から人並以上に見せようとするのが後者。

#### ■見栄を張った経験、張られた経験が思い出せない

- ・知り合いの言動を例として出すも、再考してみると見栄と断定しかねるものばかりで、自分で見栄を張った経験も、あると思われるのに想起できないという事態が続く。

<sup>9</sup> 2階のレンタルスペース(机、椅子、ホワイトボード、空調完備)にて。

<sup>10</sup> 16:10~18:00のうち、事前の説明やテーマ決め、アンケート記入の時間を除いた時間である。

<sup>11</sup> 実際は話題が前後したり言い直したりするため進行のペースは見た目よりずっと遅い。対話は一般参加者4名(偶然にも全員男性、10代学生、30代大学非常勤講師、唯一の初参加40代公務員、50代会社員)と筆者、山本氏の6人で行われた。告知が遅くなったため人数は少なかったがじっくり対話を行えた。

## 論考の扉

・「知ったかぶり」の例のみ、それはしたこともされたこともある見栄だとされた。

### ■見栄かどうかを判断する基準や条件は何か

- ・見栄は嘘かどうか。嘘とまでは言えないようなものもある。
- ・同じ人の同じ言動でも、見栄とされたりされなかったりする。
- ・稼いでいる人にとって高級車や高いレストランなどは、相応なもので見栄ではない。
- ・羨ましがりたいという動機があるかどうかで見栄かどうかが決まる。
- ・その人の普段の姿・本来の姿と言動との違いで見栄かどうか判断できる。

### ■議論の整理

- ・その人がどういう人か知らないと判断できないという意見だが、本当にそうなのか。
- ・見栄は思っていたよりも掴みどころがない。
- ・ここまでの意見から見栄は「無理して相応でないことをすること」というのは確定できそうであるが、ここにどのような条件が加わるのか。

### ■見栄と似たものについて

- ・謙遜は方向が逆だが無理して実際の自分でないように言うのは同じ。
- ・アピールは自分を良く見せるという点で同じ。

### ■相応でない言動でも、見栄ではないと判断されるものについて

- ・就活は自分のアピールをするべき場所、婚活パーティーも同じ。
- ・特定の人に対してであれば見栄ではないのではないかな。
- ・必要性があるアピールは見栄とは思われないのではないかな。
- ・「見栄は必要がないのに無理して相応でないことをすること」と言えそうである。

### ■見栄を張ることは悪いことなのか（論点が多く出たので少し話題をずらすことに）

- ・見栄の例を出そうとするとどこか悪口や陰口のようになるのは何故か。
- ・見栄は嘘のように単純に悪いことであるとは言えない。

- ・見栄は悪いというよりは、友達同士のように横並びでいたい関係の中で、上に立っているように振る舞われたり、称賛を強要されたりすると、付き合うのが面倒になるのではないか。
- ・日本は横並びでいようとする意識や同調圧力が強いためにアピールも好まれない。
- ・当初は個人の狙いのみに見栄を生む原因があると考えていたが、社会やこちらの見方にも見栄とを感じさせる原因があるのかもしれない。(ここで終了)

内容は個々の回やカフェによって千差万別ではあるもの、おおよそ以上のように様々な論点を出しながら話が進む。参加者が気づきを得る場面は、自分とは異なる観点からの意見や疑問に出会ったり、自分の疑問が解決されたり考えがまとまったりするときや、具体例が挙げられるときなど、様々である。テーマに関するだけでなく、話の進み方やプロセスのようなメタなものに対して気づきを得る参加者もいる。いずれにせよ参加者は先の姿勢を守って探求を行う中でそれぞれ大小様々な気づきを得ていると言える。

### (2) 哲学カフェのカフェ性

哲学カフェはフランスのパリのカフェ・デ・ファールという喫茶店で偶然始まったもので、その後広まっていくうちに喫茶店以外の場所でも開かれるようになったが、哲学カフェという名前はそのまま受け継がれている。イギリスのコーヒーハウスや革命期のパリのカフェのように、喫茶店としてのカフェは「階級を超えた市民による自由な社交の場」、「言論の自由を保障された場」と考えられてきた。哲学カフェの始まりは偶然ではあるが、カフェと哲学は基本的に相性の良いものと見なされている。しかしながら本論文ではそのような歴史的な成り立ちや象徴的な意味ではなく、現在実際に主催者たちが哲学カフェの場所づくりの際に「カフェのような空間」としてイメージしていることから、哲学カフ

## 論考の扉

エにおけるカフェの性質を考えたい。カフェのような空間とは具体的には「誰もが自由に入出入りでき、リラックスして話し合える空間」や「安心して・落ち着いて話し合える場所」とされる。これらを分析し導き出された性質をカフェ性と呼ぶこととする。カフェ性として挙げられるのは以下の五つである。

1. メンバーシップの開放性：参加資格はない(基本的に定員と参加費はある)
2. 平等性：進行だけが特別ではあるが、発言が地位や立場によって制限されない
3. 発言の無責任性：発言がその後のキャリアや人間関係などに響く心配が少ない
4. 半匿名性：氏名や職業を隠すのも明かすのも自由だが必要ではない
5. 対面性：全ての人がある場に居合わせる

これらの性質がもたらすものはそれぞれ次の通りである。まず、1.メンバーシップの開放性は多様な人を受け入れることで多様な意見を得やすくする。2. 平等性と 3. 発言の無責任性は発言の際、自分の地位や立場への考慮や、その後のキャリアや人間関係への懸念を減らすことにつながる。4. 半匿名性はプロフィールを明かすことによって自分の発言内容が制限されたり、先入見や偏見をもたれたりするのを防ぐことができる。そして 5. 対面性は、ネットのような匿名かつ顔が見えないやり取りよりも誹謗中傷を言いにくくさせるとともに、雰囲気や声、ジェスチャーや表情など理解の手がかりを増やしている。これらが複合的に効果をもたらし、立場によって発言の機会や強弱が決まらず発言内容は平等に扱われることで「立場上話さなくてはいけないこと」ではなく「自分が考えたいこと」に集中しやすくなる。つまりカフェ性は発言のハードルを下げ、自由な思考を補助しており、哲学対話に求められる姿勢を維持する効果があると言える。ここから、カフェ性は探求に没頭できる環

境作りに大きく寄与しており、哲学対話の哲学性と相性が良いことがわかる<sup>12</sup>。

### (3) 他の哲学対話活動との比較

哲学実践には他に教育やケアといった分野があるが、これらにはカフェとは異なる性質や、哲学対話によって達成しようとしている更なる目的がある。

まず教育について。学校で行われる哲学対話は一般的に授業の中で行われる。クラスのように既存のコミュニティに属する者同士が行う対話の中での思考や発言は、普段どういう振る舞いをする人かという前情報だけでなく、後にどのようなことを思われるかという対話後への懸念に多かれ少なかれ影響されることになる<sup>13</sup>。また、生徒たちは興味の有無に関わらず、ある種強制的な形で対話に参加することになる。このような状況から対話をスタートさせることになるため、教育では教室を探究の共同体に作り変えるという言い方がされ、いかに生徒が探求に集中できる環境を作るか、どうしたらテーマに興味を持ってもらえるかが重要な課題であるとされている(cf., 小川, 2017, 62; 土屋, 2013, 79)。また、対話を通して生徒たちは哲学的思考力・対話力、具体的には論理的思考力、

---

<sup>12</sup> サイエンスカフェにおいても、敷居を下げることで科学に気軽に接することができるという狙いがあるといい、たしかにハードルを下げる点は共通しているといえる。しかしながら、哲学カフェでは哲学の学問的な知識を市民にもわかりやすく伝えることや、哲学研究者が市民と交流することを主たる目標としては掲げてはならず、専門知を市民にわかりやすく教えることを目的に掲げるサイエンスカフェとは全く異なる活動といえる。サイエンスカフェの哲学版のような、哲学の専門知をわかりやすく伝え市民から気軽に質問をしてもらえるような場所たしかにあり、またそれも同じく哲学カフェという名前で活動している場合や、同じように紹介される場合がある。主催者の中にはこれらは明確に区別せず毛色の違いとして見るべきではないかと考える人もいたが、アンケートにおいて参加後の感想に対話ではなくもっと哲学の知識を聞きたかったと回答した人はおらず、区別して扱う方が混乱は避けられるのではないと思われる。

<sup>13</sup> 梶谷氏は職場での哲学対話を勧めているがこれについても同様のことが言える。

## 論考の扉

批判的思考力、相手を尊重する思考といったことを獲得することが目指されている。

次にケアについて。臨床哲学とは患者に限らず苦しんでいる人々を対象とし、そのような人々の視点で哲学をすることであるとされている。具体的なケア系の哲学対話活動を挙げると、例えば大阪と東京で開かれている「おんころカフェ」の紹介文では「がんや難病の患者さん、そのご家族が対象です。哲学者が行う「対話」が病と共に生きる方々のサポートとなることを目的に開催しています。(プライバシー保護の観点から、それ以外のかたのご参加はご遠慮いただいています)」<sup>14</sup>とされておりこのように当事者会として開かれているものも多い。また、より対象が広く開かれ「死」や「悲しみ」<sup>15</sup>といった深刻なテーマが扱われるようなものもある。どちらにせよ何かに苦しむ人々が来ることを前提とし、そうした人が安心した環境で苦しみを吐露したり同じ境遇の人の話を聞いたりすることを通して癒されることが目的とされる。

教育やケアの特性や目的をカフェと比較すると、カフェは既存のコミュニティでも当事者会でもなく、また特に哲学対話を行うこと以外に達成されるべき目的も設定されていない。この意味で、哲学カフェは気兼ねなく純粋に哲学対話に没頭することのできる場所であると言える。したがってこれが哲学カフェの固有性であると言える。

### 4. 哲学カフェの目的と意義

以上から、哲学カフェの目的は対話的思考による探求と気づきであると考えられる。目的達成のためには問いへの対峙、多角的な視点の共有、安心した雰囲気が必要とされるが、立場に関係なく気軽に参加でき自由な発言を許されるというカフェの性質がこれらを支えている。このように哲学カフェの活動は複数の要素を含んでいるが、実際の活動ではこれ

---

<sup>14</sup> “哲学対話”，おんころカフェ

<sup>15</sup> “「かなしみぼすと」について”，かなしみぼすと

らは複雑に結びつき補完し合って作用している。

目的を確認したところで次に哲学カフェの意義を考えたい。実践者から語られる意義は抽象的であったり、学問的な哲学の観点や、更に活動が広まった暁にはという未来の時点から語られたりするため(cf., 鷲田, 2015)、本論文では参考程度に留め、あくまで対話後に参加者にとつたアンケートを基にして分析を行った。全員を回答対象とした質問「あなたの感じた哲学カフェの良さや、普段の生活で行う会話や思考との違いをお書きください」の回答(自由記述)において、同じもしくは類似している部分が見つかった(なお、この質問はアンケートを行った全 11 回のうちの第 2 回以降に実施したものであり、回答者数は 54 人中 48 人であった。以下分類項目ごとに回答者数を付すが、同一回答者の回答が複数の項目に跨る場合には、いずれの項目も 1 人とカウントした)。それらは大まかに(a)「一つのことを考えられる、気づきがある」(25 人)、(b)「安心して話ができる(聴ける・話せる)」(17 人)、(c)「色々な人がいること、色々な意見があることを感じられる」(20 人)、(d)「一人ではできないこと、普段の生活ではできないことができる」(26 人)、とその他(3 人)に分けることができた。また、参加経験者を対象にした質問「これまで参加したなかで特に充実した哲学カフェはどのようなものですか？また、充実度に重要なのは何であると考えられますか？」の回答も、大まかに上の(a)～(c)およびその他に分けることができた(それぞれ回答者数は 15 人、10 人、9 人、その他は 3 人。これも第 2 回以降の質問であり、回答者数は 36 人中 29 人であった)。

これと逆の質問「これまで参加したなかで、つまらなかった哲学カフェはありますか？あればその原因は何であったと思いますか？」の回答は、無回答や「無し」(10 人)という回答を除けば、(A)「話が深まらない」(9 人)、(B)「高圧的な態度の参加者」(4 人)、(C)「進行役の過干渉」(7 人)、その他(1 人)に分類することができた(これは第 1 回からの質問で、回答者数は 40 人中 26 人)。(A)～(C)はそれぞれ、(a)～(c)が得られていないことへの不満である。(A)は具体的には話の深まりに寄与しない単な



## 論考の扉

る意見の乱立であったり、堂々巡りであったり、特定の参加者間でのみ議論がされる状況であったりと様々である。これは進行役が改善しうることではあるため、(A)は部分的には進行役の不干渉に対する不満となっている。(C)は逆に発言が多かったり話をまとめようとしたりするなど進行役が干渉し過ぎることへの不満である。

ここから、参加者は(a)～(d)を良さであると認識しており、逆にこれらが損なわれた場合に不満を抱いていることがわかる(ただしそのような良さに参加して初めて気づく参加者もいる)。他方、(a)～(d)は上記の哲学カフェの目的達成に必要な諸要素に当たっている。したがって、参加者にとっては上記の諸要素が備わった場所が実現されていることそれ自体が哲学カフェの意義となっていると言える。

### <結論>

哲学カフェとは「対話的思考による探求の中で気づきを得る場所」である。哲学カフェにおいて参加者は「探求する姿勢」「頭ではなく場で考える姿勢」「安全であろうとする姿勢」を求められる。第2の姿勢は探求のハードルを下げ、第3の姿勢は危険を退けることで第1の姿勢を助けている。また、哲学カフェのカフェ性(メンバーシップの開放性、平等性、発言の無責任性、半匿名性、対面性)は、多様な人・意見を受け入れるだけでなく、発言しやすくしたり自由な思考を補助したりする効果を持ち、探求に没頭する環境作りに大きく貢献している。参加者は哲学カフェの有する複数の要素それぞれに良さを感じ、それらが合わさった哲学カフェという特殊な場所が開かれること自体に意義を感じている。

### ●参考文献

- ・赤井郁夫 (2013). “哲学カフェの「原則」とルール”, 以心伝心心～あまがさき哲学カフェ～, <http://cashewnut27.blog.fc2.com/blog-entry-101.html>, (2018年1月9日).
- ・小川泰治 (2017). 「「子どもの哲学」における知的安全性と真理の探

究 何を言ってもよい場はいかにして可能か」, 『現代生命哲学研究』第6号, 62-78頁.

・梶谷真司 (2015). 「対話としての哲学の射程——グローバル時代の哲学プラクティス」, 斎藤元紀編『連続講義 現代日本の四つの危機——哲学からの挑戦』所収(91-114頁), 講談社.

・土屋陽介 (2013). 「子どもの哲学における 対話の「哲学的前進」について」, 『立教大学教育学科研究年報』第56巻, 77-90頁.

・山田富秋 (2011). 『フィールドワークのアポリア——エスノメソドロジーとライフストーリー』, せりか書房.

・山本和則 (2016). “【代表が行く】第一回：寺田俊郎さん(@Café Klein Blue)”, CAFÉ PHILO, <http://cafephilo.jp/topic/topicpost-217/>, (2018年1月9日).

・鷺田清一 (2014). 『哲学の使い方』, 岩波書店.

・鷺田清一 (2015). 「菊地建至氏の書評への返信」, 『社会と倫理』第30号, 268-269頁.

・ “「かなしみぼすと」について” , かなしみぼすと,  
[https://kanashimi-](https://kanashimi-post.jimdo.com/%E3%81%8B%E3%81%AA%E3%81%97%E3%81%BF%E3%81%BD%E3%81%99%E3%81%A8-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6-1/)

[post.jimdo.com/%E3%81%8B%E3%81%AA%E3%81%97%E3%81%BF%E3%81%BD%E3%81%99%E3%81%A8-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6-1/](https://kanashimi-post.jimdo.com/%E3%81%8B%E3%81%AA%E3%81%97%E3%81%BF%E3%81%BD%E3%81%99%E3%81%A8-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6-1/), (2018年1月9日).

・ “イベント情報” , CAFÉ PHILO, <http://cafephilo.jp/event-page/>, (2018年1月9日).

・ “国立大学の人文系学部・大学院、規模縮小へ転換 文科省が素案提示” , 産経ニュース,  
<http://www.sankei.com/life/news/150528/lif1505280016-n1.html>, (2018年1月9日).

・ 哲学対話 おんころカフェ, <https://ameblo.jp/oncolocafe/>, (2018年1月9日).

おまけ：花岡論文を受けて（山本 和則）

## 論考の扉

君嶋氏に初めて会ったのは2016年10月だったと思う。相談の内容を聞いて「哲学科の卒論で哲学カフェが取り上げられるなんて…」と時代の流れ(?)を感じたことを記憶している。氏とは論文完成後に何回か飲みに行っている<sup>16</sup>のだが、論文の内容について十分な応答ができているとは思えないので、(紙面の都合上)ごくごく簡単にではあるが、この場を借りて、前掲卒論(花岡論文)についてコメントしたいと思う<sup>17</sup>。

花岡論文では、多様な哲学実践と対比する形で「哲学カフェの固有性」が論じられている。現在の日本では哲学カフェ以外にも「こどもの哲学」や「哲学カウンセリング(相談)」など、それぞれルーツの異なる実践が多様な形で展開されている。しかし、それらは明確に区別されず、一括りに「哲学対話」とみなされている場面も多いと思われるため、それぞれの実践の特徴について改めて確認することは、どの立場の実践者にとっても有意義だと思われる。

さて、花岡論文では「(哲学対話を行う以外に)達成されるべき目的がない」ことが哲学カフェの特徴とされている。この見解には異論もあるだろうが、「カフェ」という場の性質を考えれば一定の説得力があると私は考える。例えばカフェ文化研究家の飯田美樹は「カフェという場は他の公共的な施設とは異なり、合目的性がほとんど追求されない不思議な空間」<sup>18</sup>であると指摘している。カフェはただ飲み物を飲む場所ではなく、かつ一度店に入ってしまうと、その空間で何をするかは基本的には客の自由である。カフェという場がこのように「目的からの解放」を性質として持つのであれば、カフェ(もしくはカフェ的な雰囲気)で行われる哲学カフェにおいても同様に「達成されるべき目的がない」のは自然なことだと思われる。これは、主催者や参加者がそれぞれ多様な目的

---

<sup>16</sup> 特に京都七条のたこ焼き屋兼居酒屋「七ちゃん」はオススメである。燻製も有る。<https://tabelog.com/kyoto/A2601/A260101/26023131/>

<sup>17</sup> 論文の掲載を優先したら、自分の担当分は2ページだけになってしまった。

<sup>18</sup> 飯田美樹『新装版 Caféから時代は創られる(いなほ書房,2011)』p.117

のもと哲学カフェに参加している、という実情を言い換えただけでもいえるが、このような多様性自体が哲学カフェの特徴だともいえる。<sup>19</sup>

また、花岡論文では「カフェ」という場の持つ特徴が哲学カフェにいかにか影響を与えているか、ということも論じられており、個人的に興味深かった。カフェの特徴としては「メンバーシップの開放性」「平等性」「発言の無責任性」「半匿名性」「対面性」の5つの性質が挙げられており、これらの性質が探求に没頭する環境づくりに寄与している、とされている。これらは大まかにいえば「カフェに集まる人同士の関係性」の持つ性質だといえるだろう。ただ、一般的なカフェの環境を思い浮かべると、他の席の声や雑音、音楽が聞こえてきたり、店員さんが飲み物を持ってきたりなど、むしろ探究の邪魔になる要素も多いのではないかとされる。これらのノイズを排除するために、貸切や個室で哲学カフェを開催する場合も多いと思われるが、私は（むしろ探求の邪魔になるとすら思える）一般的なカフェの環境もまた、哲学することに何らかの寄与をしているのではないかと感じている。この点は花岡論文を引き受けて、私が今後考えていきたい仮説であるが、これは別の機会に詳しく書くことだけを宣言して、ここで筆を置きたいと思う<sup>20</sup>。花岡論文が、何らかの形で読者の参考になることを願っている。

---

<sup>19</sup> 他にも「メンバーシップの開放性」や「半匿名性」から「開かれた場」としての哲学カフェの固有性を捉えることは可能だと思うが、今回は取り上げない。

<sup>20</sup> 佐藤和久が『フィールド哲学入門（ナカニシヤ出版,2015）』で「思考のための場所」について述べていることが、この問いを考えるヒントになるのではと思う。

（略）私にとって哲学的な場所とは、私が私であることを一時中断できるような場所だということ。（中略）私とその役割を一時停止し、かつそこにいることを許されているような場所。ある役割ともう一つの役割との間の移行地帯（サード・プレイス）。（中略）こうしたとき私は、私というアイデンティティを堂々と宙づりにし、自分であることを一時停止することが正当化されている。（p.36）

佐藤はこのことは「自分自身を構成する環境へのくなじみ」から一時的に切り離される（*ibid*）ことであるとも言い換えている。